

2024年2月26日

趣意書

2025年東京国際ツバキ大会について

準備運営委員会委員長

田中孝幸

国際ツバキ協会は、国際ツバキ大会を2年ごとに世界各地で開催しています。日本は1980年に京都市で開催した後、約10年ごとに舞鶴市、宮崎市、久留米市で開催し、たくさんの世界中のツバキ愛好家、研究者、生産者がツバキの故郷、日本に集まりました。2020年には長崎県五島市での開催を予定していましたが、コロナのため、やむなく中止しました。その後、多くの参加予定の方からは是非日本で行って欲しいとの声が上がり、2022年3月に Motta 会長からアメリカに代わって2025年に開催してもらえないかという依頼がありました。そこで、日本の役員で検討した結果、引き受けることになり、2023年3月のイタリア大会で東京開催を発表しました。

2024年1月には、会場をホテル椿山荘東京に決定し、東京観光財団からの開催助成金なども決定し、その後プレ・コンGRES・ツアー、本大会、ポスト・コンGRES・ツアーなどの視察施設に挨拶をしています。視察箇所は、ツバキの素晴らしいコレクションがあったり、日本の文化、歴史を知ってもらうために選んだ施設で、いずれの視察施設からも暖かく、積極的な対応をしていただけるとのご返事をいただきました。

その中でも特筆すべきこととして、高円宮久子妃殿下におかれまして国際ツバキ大会が日本の東京で行われることの意義をご理解いただき、開会式にご臨席していただけることになりました。

日本で園芸が盛んになったのは江戸時代で、その先駆けがツバキでした。1630年に書かれた『百椿集』によると、1615年の暮れにツバキの新品種が多数発表されました。そのツバキは、17世紀、上流階級の人々の間で大流行し、その世紀末に京都から江戸へ、上流階級から庶民へと広がっていき、ツバキブームに続いて、江戸時代には園芸植物が次々に流行しました。

ヨーロッパでツバキブームが起きたのは鎖国をしていた江戸時代の1830年頃で、ジャポニズムの先駆けでした。当時、すでにフランスだけで700以上、イギリス、ドイツ、イタリア、ベルギーなどでそれぞれ約100以上のツバキ品種が育成されています。ツバキは耐寒性が強いのですが、それらの地域では温室植物で、冬に緑の葉を持ち西洋人好みの八重で豪華な花を咲かせるツバキは上流階級の方だけが楽しめるものでした。その後、温暖でツバキを屋外で育てることのできるスペイン、ポルトガル、南仏、イタリア、スイスの南部、イギリス南部、さらにアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどでも盛んになりました。ポルトガルでツバキは日本を意味する「ジャポネイラ」とも呼ばれています。また、最近では中国でもツバキブームが起きており、各地に広大なツバキ園が作られています。

2年に一度世界中の都市がホストとなって国際大会が開催されている園芸植物はツバキだけです。ランはドーム球場などで国際ラン展を開いていますが、主に国内の、また一般の人のための展示、苗の販売が中心となっています。世界中のツバキ愛好家は、まず彼らの愛するツバキを作った日本に興味を持ち、国際大会などで親切で謙虚でマナーの良い日本人と接して日本を好きになった方たちです。フランスやイタリアなどのツバキ大会には、野点や生け花を催し、着物を飾るところもあり、さながらジャパン・フェスティバルです。

今回、2025年に国際ツバキ大会をツバキの故郷日本の東京で行うことになりました。この大会は、研究発表あるいは知識の交換の場であることはもちろん、会員間の親睦を深め、日本を世界中のツバキ愛好家、研究者の方々に知っていただく良い機会でもあります。参加者の方にはさらに日本に良い印象を持って帰っていただくよう、国際ツバキ協会はできるだけの努力をしたいものと思っています。

皆様におかれましてもご協力賜りますようお願い申し上げます。